

杜甫「春望」の濺涙について

野口 宗 親

一

杜甫「春望」の頷聯「感時花濺淚 恨別鳥驚心」（對句）については、大きく分けて、

A 時に感じて花にも涙を濺ぎ、別れを恨みて鳥にも心を驚かす
B 時に感じて 花は涙を濺ぎ、別れを恨みて 鳥は心を驚かすと、全体の主語をA 作者として読む説と、B 花と鳥として擬人法に読む説と二つの説がある。

なぜ説が分かれるかというと、その一番大きな理由は、「花濺淚」「鳥驚心」というN—V—N（Nは名詞。Vは動詞）の簡単といえ、簡単な文法構造にあらう。すなわち、

A 主語を作者に読む説（杜甫が涙し心驚く）

①「花濺淚」「鳥驚心」の文法構造は、現代中国語の存現結構*に近いものとして捉えることができる（*たとえば、「外面下着雨」（外に雨が降っている）・「桌子上放着一本書」（机のうえに書物がおいてある）など）。（『校注唐詩解題辭典』（宇野直人執筆）⁽¹⁾）

②文章なら「花が涙をそそぐ」ことであるが、詩では「濺淚於花」の花を提起した形（目的語を主語の位置にもってくるのを

提起という）と見てよい。（『猪口篤志『評訳中国歴代名詩選』⁽²⁾）

③濺・驚は使役動詞の用法である。この一聯は、国事を痛むが故に、春の花がわたしの涙を飛び散らせ、別れを恨む苦しみの故に、鳥の声がわたしの心を驚かせると言っている。（『王力『古代漢語』⁽³⁾）

B 主語を花と鳥に読む説（花が涙し鳥が心驚く）

中国語の文法として、主語のすぐ後に述語がくるから、花・鳥を、濺・驚の主語と解するのが、最も自然である。（『入谷仙介『唐代名作選』⁽⁴⁾）

というように、様々な文法上の解釈を可能にさせる文法構造なのである。本来このような文法上の不安定さをお互い補完するために對句が使われるので、逆に對句を手掛かりにして句法構造や品詞の弁別ができる場合もあるのだが、この二句は見極めがつきにくい。私見では、濺・驚の動詞が自動詞・他動詞いずれにも用いられるという性格のうえに、作者がこの聯に多くの思い、事柄をもちこもうとした（或いは付け加えようとした）ために、字数、平仄、韻などの関係で、言葉足らずの表現になったものと思われる。對句の制約も大きい。

したがって過去において、文法の上だけでなく、リズムの上から、内容の上からこの聯を解釈しようという試みがなされてきたが、これらはおおむね主観的な読みによるところが多く、決定的な根拠を提出し、他方を否定するところまでには至っていない。A・B兩説とも可能、或いは片方の説も一概に捨て切れないなどとして、慎重

な態度を取る人も多い。

Bの擬人法に読む説は、周知のように故吉川幸次郎博士が従来もあつた読みを踏まえて、改めて提唱されたものである。

この十字の大体の区切りが、感時／花／涙、また恨別／鳥／驚心であることは、疑問の余地がないとして、もし涙と驚心の主格が杜であるとするならば、花を見るにつけても私は、鳥の声をきいても私は、と、日本語にうつせば言葉を足さねばならぬ。それだけの補足が、原文の音声では、花の後、鳥の後、／符で示した休止の時間を過大にさせ、リズムを、最善の状態にしない、と感ぜられる。それに反し、花をもって涙を潑ぐの主格、鳥をもって別れを恨むの主格とすることは、リズムを、より多く自然にする。(中略) そうした来歴〔筆者注、六朝・唐時代にしほしば見られる花や鳥の擬人化の手法〕の上に、はらはらと涙を潑ぐ花、びくびくと心を驚かす鳥と、新しい自然のドラマを作ったのが、杜のこの聯であると、私はしたい。〔『杜甫詩注』第三冊〕⁽⁵⁾

これに対し、黒川洋一氏は「春望」詩を「杜甫の詩のうちで、もっとも有名なものであるが、とくにすぐれるわけではない」とされたうえで、

杜甫の詩の中に花と鳥とを擬人化した例としては、「岸花は飛んで客を送り、檐燕は語りて人を留む」(「潭州を発す」というのがあるが、それは軽快の詩にはふさわしい技巧であるとしても、この「春望」のような深刻な内容を持つ詩にあつてはそぐわないと感じられる。やはり、この二句は北宋の司馬光が、「花と鳥

二

は平時には嬉しむ可き物なるに、之を見て泣き、之を聞いて悲しむは、則ち時のさまを知る可し」というように「花にも涙を潑ぎ」「鳥にも心を驚かす」と読むのが穏当と考える。〔『杜甫』(鑑賞中国の古典17)〕⁽⁶⁾

と述べる。

筆者は以前から、B説の花と鳥を主語として擬人法に読むのが、文法上でも、全体構成の上でもごく自然ではないか、古代では擬人法はむしろ普通の修辭法だし、花が涙し鳥が心驚くと取る方が、より作者の悲しみに沿った解釈ではないかと考えていた。しかしながら、杜甫の花と鳥に対する態度など幾つかのことを調べてみて、擬人法と取るのも少し無理があるのではないかと、疑うようになってきた。

そもそもこの「春望」は比較的易しい言葉が用いられ、難しい典故も無い。対句も首聯、頷聯、頸聯と、一見整然としている。そのぶん意外に具体性に欠け、意味がはっきりしない面がある。特に前半は、「国、城、山河、草木、時、別、花、鳥」と包括的・抽象的な名詞が並べられているので、具体的な意味を追求しようとする、当時の杜甫の心境、彼をとりまく背景についての読み手の理解により、ある程度読みの幅は許されるであろう。ただ、どこまでの読みの幅が許されるのか、どちらの読みがより妥当性が強いかなどは、まだ検討の余地がありそうに思える。

その出発点として、先ずこの聯に使用される言葉や表現を、もう少し歴史的に、或いは杜甫の詩の中で洗い直してみることが必要ではないかと考えた。その考察を通じて筆者がBの擬人法説を疑うよ

うになった理由を幾つか提出してみたい。今回は一般的な言葉が多いこの聯の中で、詩語としてはあまり見かけない「潑涙」という表現について調べてみた。テキストは清の仇兆鰲『杜詩詳注』本（編年本）により、その巻数を示した。

二

「潑」は漢文では「そそぐ」と訓読される。「そそぐ」と訓まれる漢字にはほかに、「漑、灌、澆、灑、瀉、注」など幾つかあるが、これらの動詞は意味が少しずつ違うにもかかわらず、日本では同じ「そそぐ」と訓まれている。

「潑(jiān)」は現代中国語でも生きた言葉である。試みに『中国語動詞用法辞典』を見ると、

splash; spatter (液体が) はね上がる、飛び散る。〈汽車從泥坑里開過去、潑了一褲子泥〉車がぬかるみを走りぬけて、泥をはね上げてわたしのスポンを泥だらけにした。〈潑了一牆墨水〉壁いっばいにインクが飛び散った。〈衣服上潑滿了油点兒〉服いっばいに油がはねた。〈硫酸潑到衣服上、都燒成窟窿了〉硫酸が服にはねて、焼きこげ穴があちこちにできた。〈海水沖擊崖潑起無數白色的浪花〉海水が岸壁に激しく打ち寄せて無数の白い波しぶきをあげた。⁽⁷⁾〔筆者注、中国語原文は簡体字〕

とある。液体がパッと飛び散ったり、何かにはねかかったりする場合に用いられており、存現目的語もとる。液体が流れる意ではない。

この「潑」は時代を溯れば、『水滸伝』や『杜通事諺解』などの口語資料（元・明代）にも、

●〔李達〕把那卓子只一拍、潑那老人一臉熱汁、那分麪都潑翻了（李達が）卓をドンとたたくと老人の顔一面に熱い汁がはね飛び、麪がすっかりこぼれてしまった。⁽⁸⁾

●狗有潑草之恩（犬に草に潑ぐの恩あり）。⁽⁹⁾

と同様の使用例が見える。

ところで「潑(せん)」という字は古代ではいつごろから使われてきたのであろうか。調べた範囲では先秦の文献には見当たらなかった。『説文解字』にも採られていない。かの有名な『史記・廉頗藺相如伝』の名場面、「相如曰、五步之内、相如請得以頸血潑大王矣」（相如曰く、五歩の内、相如請う、頸血を以て大王に潑がんと）に見られるのが古い例であるが、『史記』にはこの部分だけである。『戦国策・魏策三』にも「君不行、血潑君襟矣」（君行かずんば血、君の襟に潑がんと）とある。もともとは「けがしそそぐ」という意であったらしく、「湫(せん)」「潰(さん)」等と通じて用いられた。⁽¹⁰⁾『戦国策・齊策三』には「臣請以臣之血湫其衽」（臣請う、臣の血を以てその衽に湫がんと）とある。『説苑・復恩』などにも見えるが、これらはいずれも血をそそぐということで、漢代の頃は一つの常套語になっていたと考えられる。後に述べるように杜甫の詩に「潑血」という言葉が二度見えるのも、これを踏まえてのことである。のちに『広韻』と『玉篇』に「潑、潑水也」、『集韻』に「潑、水激也」とあるように、「液体をはねかける」「液体が飛び散る」意に拡大して用いられるようになった。しかも「潑」には俗な（口語的な）イメージがあ

つたらしく、会話に多く用いられたり、楽府に用いられたりしている。唐の慧林『一切経音義』では「俗字也」と言いきっている。¹¹⁾このことは杜甫が「潸涙」と表現した原因を考える上で参考になる。それでは杜甫以前に「潸」は詩において、どういう使われ方がなされてきたのであろうか。調べた範囲で「潸」が使われている句をすべてあげてみる。¹²⁾

- ① 灑血潸飛梁 灑血 飛梁に潸ぐ（晋・傅玄「秦女休行」）
 ② 汗汚莫潸浣 汗汚 潸ぎ浣う莫かれ（晋・「上声歌」）
 ③ 緑水潸長袖 緑水 長袖に潸ぐ（梁・簡文帝「雍州曲三首・北渚」）

- ④ 潸妝疑薄汗 妝に潸げば薄き汗かと疑う（同前「櫛歌行」）
 ⑤ 弓衣湿潸水 弓衣 潸水に湿う（北周・庾信「詠畫屏風詩二十五首」）

- ⑥ 絲垂遙潸水 絲垂れて遙かに水を潸ぐ（陳・陰鏗「觀釣詩」）
 ⑦ 潸沫擁沙洲 潸沫 沙洲を擁す（隋・薛道衡「入柳江詩」）
 ⑧ 驚波上潸日 驚波上りて日に潸ぐ（隋・孫万寿「遠戍江南寄京邑親友」）

- ⑨ 潸石迴湍咽 石に潸ぎて迴湍咽ぶ（唐・駱賓王「至分水戍」）
 ⑩ 弄篙莫潸水 篙を弄するも水を潸ぐ莫かれ（唐・王維「蓮花塢」）

⑪ 跳波自相潸 跳波 自のずから相い潸ぐ（唐・王維「樂家瀨」）
 「詩經」「楚辭」から杜甫と同時代の詩人まで、かなりの範囲で調べたのだが、これだけしか採取できなかった。「潸」は詩語としてあまり使用されなかったことがわかる。例③以降はもっぱら「水や波

四

のしぶきが散る、かかる」意味で用いられている。梁代（六世紀）以降であるから、ずいぶん新しい。涙と関連して用いられた例はなかった。ただ、仇兆鰲『杜詩詳注』巻四「春望」の注には、「潸」の用例に『拾遺記』（晋・王嘉撰、梁・蕭綺録）から「漢獻帝為李傕所敗、后以淚潸帝衣」（漢の獻帝李傕の敗る所となり、后涙を以て帝の衣に潸ぐ）を引く。そこで『百子全書』や『漢魏叢書』に収める現行の『拾遺記』巻六の該当部分を調べてみると、「帝傷趾、后以綉拭血、……。以淚澣帝衣及面、潔靜如浣」（帝の傷跡、后、綉を以て血を拭い、……。涙を以て帝の衣及び面に澣げば、潔靜なること浣うが如し）となっており、「潸」ではなかった。もともと、「澣」と「潸」は通じて用いられるので、涙と関連して用いられた例とすることもできるが、この場合は「后が帝の衣や顔に涙をふりかける」という意である。少しつけ加えると、この話は『後漢書・皇后紀』をもとに後の美談に仕立てあげたもので、原文は「后手持縑數匹、董承使符節令孫徽以刃負奪之、殺傍侍者、血潸后衣」（后、手に縑數匹を持てば、董承、符節令の孫徽をして刃を以て負してこれを奪わしめんとす。傍に侍る者を殺し、血后の衣に潸ぐ）となっている。同じ澣（潸）を用いながら使い方が違う。

次に、杜甫は「潸」の字をどのように用いているのだろうか。杜甫の詩には「春望」のほかには次の四例が見える。

- ① 談笑行殺戮 談笑して殺戮を行ひ
 潸血滿長衢 潸血長衢に満つ
 （卷十三、草堂）
 ② 涕淚潸衣裳 涕淚 衣裳に潸ぎ

悲風排帝闥 悲風 帝闥を排せんとす

(卷十五、貽華陽柳少府)

③ 疊壁排霜劍 疊壁 霜劍を排し

奔泉潸水珠 奔泉 水珠を潸ぐ

(卷二十一、大曆三年春白帝城放船出瞿唐峽夔府將適江陵漂

泊有詩凡四十韻)

④ 念爾此時有一擲 念う爾此の時一擲有らんことを

失声潸血非其心 声を失い血を潸ぐは其の心に非ざらん

(卷二十二、呀鵲行)

このうち①④の潸血は、先に述べた『史記』などにもとづく言葉である。⁽¹³⁾②の「涕淚衣裳に潸ぐ」が涙と関連して用いられた唯一の例で、『拾遺記』の場合と同様、涙が何かにふりかかるという使い方がなされている。これは「花潸涙」を「涙が花にふりかかる」と読む考え方ともつながろう。「潸」は潸ぐ対象をとる可能性が高い動詞である。

以上、杜甫以前、及び杜甫の「潸」の用い方を調べてみた。その結果、当時「潸」は詩語としてはまれで、新しく、少し俗なイメージをもっていたことがわかった。意味としては大体、「液体をはねかける」「液体が飛び散る」のようにかなり動きの激しさを伴って用いられていることがわかった。ただ「潸涙」という語は見つからなかった。吉川博士も「〔潸涙〕の語、『佩文韻府』によれば、この詩に始まるようであり、『文選』にはそもそも〔潸〕の字が見えない。」と述べられている。⁽¹⁴⁾では、なぜ杜甫はこの「春の望め」の場面、涙を流す形容に従来めつたに用いられることのなかった「潸涙」と

いう表現をもってきたのであろうか。次に杜甫が涙を流す場面を詩の中で如何に表現しているかを考察することによって、この問題を考えていきたい。

三

杜甫の詩は泣く描写が多いことでも特色がある。自分の身の上のこと、家族のこと、戦乱のこと、故郷のことなど様々なことを物思い涙するのである。特に安祿山の乱(天宝十四載、杜甫四十四才)以降は泣く機会が格段に増加する。杜甫は特に涙を流す場面をどのような言葉で表現しているのであろうか。「春望」作製時期(至徳二載春、杜甫四十六才)以前と、それ以降とを対比しながら考察していく。

「春望」以前では、涙を流す描写は少ない。もちろん詩数が「春望」以降のそれと較べて圧倒的に少ないこともあるが、⁽¹⁵⁾その形容も一般的である。早い時期から順番に例をすべてあげると、

① 此老無声淚垂血 此の老声無く 涙血を垂る(卷二、投簡咸華兩県諸子)

② 弟姪何傷淚如雨 弟姪何をか傷みて涙 雨の如くなる(卷二、曲江三章)

③ 涕淚在衣中 涕淚 衣中に在り(卷三、上韋左相二十韻)

④ 暮途涕泗零 暮途 涕泗零つ(卷三、橋陵詩三十韻呈畧内諸官)

⑤ 吞声躑躅涕淚零 声を吞んで躑躅し 涕淚零つ（卷三、醉歌行）

⑥ 涙下恐莫收 涙下りて恐らくは収むる莫し（卷四、晦日尋崔駢李封）

⑦ 涙下流枉席 涙下りて枉席に流る（卷四、白水崔少府十九翁高齋三十韻）

⑧ 有淚如金波 涙有りて金波の如し（卷四、一百五日夜對月）

⑨ 人生有情淚沾臆 人生情有りて涙は臆を沾おす（卷四、哀江頭）

のように前代からの常套の表現方法を用いている。⑧⑨の「春望」と同時期のものを除くと、動詞が「垂、零（こ）、下（くだ）、流、在」と、「涙がくする」という言い方が多い。比喩は「如雨」と平凡で、まるで泣く表現に意を用いていない。同じ言い方が続くのもその証拠であろう。杜甫はまだ極限の悲しみに胸をゆさぶられていないように見える。

このような前状況があつて「感時花濺淚」が詠まれたのである。⑧⑨とも考えあわせると、この頃になつてようやく泣く表現に杜甫の意が向いてきたように思う。というより、「垂、零、下、流、在」といった取り澄ました言葉では満たしきれぬ痛切な悲しみが彼の心をつき動かし、それが彼に従来とは違った言葉や表現を工夫させる結果になつたのではないだろうか。

次に、「春望」以降の涙を流す描写を見ていってみよう。杜甫は秦州、成都、夔州へと漂泊して行きながら、「帰路從此迷 涕盡湘江岸」（帰路此より迷う 涙は盡く湘江の岸。卷二十三、逃難）に至るま

で、涙を流し続けた。その間、実に多様な泣く描写をしている。

比喩（直喩）の表現は、「如水、如霰、如迸泉」があるだけで、あまり発展がない。注目されるのは、「春望」以前には見られなかった「縦横、闌干、潺湲、浪浪、滂沱、漣漣、泫然、飄零」といった擬態語が多く用いられるようになったことである。擬態語は読者の感覚に直接訴えかける働きをもつ。さらに涙は次のような多種類の動詞とともに使われた。

垂、下、落、墮、滴、流、揮、横
濺、迸、灑、沾、霑、滿、盈

ここで問題なのは「濺」と意味・用法に近い「灑（そそぐ）」と「迸（ほとばしる）」である。先にも述べたように、「濺」は「春望」以降、涙と関連して一回しか用いられない。なぜだろうか。これに対し、「灑」は杜甫が成都を離れ楊子江を下る旅に出てから多く用いるようになった。原文のみあげる。

- ① 灑涕望青霄（卷五、収京）
- ② 灑淚江漢身衰疾（卷十三、憶昔）
- ③ 流涕灑丹極（卷十四、別蔡十四著作）
- ④ 向來憂國淚 寂莫灑衣巾（卷十五、謁先主廟）
- ⑤ 灑淚巴東峽（卷十六、八哀詩）
- ⑥ 涕灑亂交頤（卷十六、夔府書懷四十韻）
- ⑦ 悵望千秋一灑淚（卷十七、詠懷古跡五首）
- ⑧ 向公泣血灑行殿（卷二十一、惜別行送向卿進奉端午御衣之上都）
- ⑨ 涕灑不能收（卷二十二、重題（異本））
- ⑩ 揮手灑衰淚（卷二十三、別張十三建封）

① 涙灑行間（卷二十三、追酬故高蜀州人日見寄并序）

これらを文法的に見てみると、「灑+涙」「涙+灑」或いは「灑+涙+場所」「涙+灑+場所」の構造であり、「花灑涙」と同じ構造はない。また、句の中に涙を流す主体（人）はいずれも出てこない。「灑」は本来、「水をまく、注ぎかける」の意で、上から下へという感覚をとまなう。はねる感覚をとまなう「灑」とは若干ニュアンスが異なる。「灑」は三国・徐幹の「涕泣灑衣裳」（涕泣衣裳に灑ぐ。贈五官中郎将四首）を始め、六朝時代にもしばしば涙を流す形容に用いられているが、この「灑」には晩年の杜甫の沈潜した悲しみがよく託されていると思う。先に出た杜甫の「涕淚灑衣裳」はこの徐幹の句などを踏まえたものであろう。

これに対し、「迸」は本来、「ほとばしる、湧き出る」という激しい動きを表す動詞で、晋の潘岳の「涙横迸而霑衣」（涙横迸して衣を霑す。寡婦賦）など、過去に使用例があるが、まれである。「迸」が使われている句は次のようである。

① 哀猿啼一声 哀猿啼くこと一声

客淚迸林叢 客淚 林叢に迸る

（卷五、九成宮）

② 曉鶯工迸淚 曉鶯 工に涙を迸らしめ

秋月解傷神 秋月 神を傷ましむるを解す

（卷十三、贈王二十四侍御契四十韻）

③ 泣血迸空回白頭 泣血空に迸らしめて白頭を回らす（卷十五、白帝城最高樓）

白帝城最高樓

④ 迸淚幽吟事如昨 涙を迸らせ幽吟する事昨の如し（卷二十三、

追酬故高蜀州人日見寄并序）

このうち、②の句について、蕭滌非氏は「この二句（筆者注、「春望」領聯の二句）と『曉鶯工迸淚 秋月解傷神』は書き方がきわめてよく似ている」とし、Aの作者主語説の一つの根拠としている。⁽¹⁰⁾確かにこの句は「花灑涙」と構造が似ており、使役形でもある。ただ一方は、一句全体で、一方は句の一部でそういう構造になっている点が違う。しかも、涙と関係するのが花でなくて鳥になっている点が興味深い。この事についてはまた稿を改めて述べてみたい。

杜甫の詩の中でこの三つの動詞は「灑」↓「迸」↓「灑」の順で出てくる。吉川博士は「せいぜいものを運動の形で見るのが、杜詩の常と思う」と述べられている。⁽¹¹⁾筆者は杜甫の「灑」や「迸」の使用は彼のそのような指向性の一つの現れではないかと考える。これまでの常套的な表現に動きを与え、詩にダイナミック性をプラスしたい。そういう意欲・気負いが杜甫をして涙を流す形容に「灑」や「迸」を選ばしめたのではないか。例えば、晋の劉琨の「涙下如流泉」（扶風歌）を、

身病不能捋 身病みて捋す能わず

淚下如迸泉 淚下りて迸泉の如し

（卷十四、杜鵑）

のように変えて使っているのもそういう指向性の現れとみたい。また、杜甫が尊敬し、学んだ北周の庾信と陳の陰铿の詩に「灑」の字が見えることも、杜甫にこの字を使う抵抗感をなくさせる意味で、決して偶然ではない気がする。

以上、涙を流す形容について、「春望」以前と以後とに分けて考察

してきた。その結果、前と後では大きな変化があり、前には無頓着であったものが、後では彼を取り巻く環境の変化とともに泣く表現に意を用いるようになり、表現が多様化していったことがわかった。「潑涙」はそういう分岐点に当たって杜甫が独自性を発揮しようとして、自分で言葉を選ぼうと試みた一つの冒険ではないだろうか。ところが対句の相手である「鳥驚心」（「心」が韻字）とのとりわけの配慮が働いて、少し無理が生じた。ただ試みである以上、それは乗り越えられるべきものである。「潑」は多分あまり気に入った言葉ではなかったのだろう。後にはほとんど用いられず、より動きの感覚がある「迸」、上品な「灑」、感覚的な擬態語、或いはその他の効果的な表現へと工夫を広げていったのである。（以下続く）

注

- (1) 松浦友久編『校注唐詩解題辞典』（大修館書店、一九八七）三四一頁。この辞典では「花潑涙」「鳥驚心」の主述関係について、その異同の類別、異同の根拠について諸説が整理されている。参照されたい。
- (2) 猪口篤志『評釈中国歴代名詩選』（右文書院、一九八二）。
- (3) 王力『古代漢語』下冊第二分冊（中華書局、一九六四）一三七五頁。高橋君平『杜甫「春望」の解釈』（『九州中国学会報』一八、一九七二）も同様の読みを主張する。この読み方では文法上の主語は花と鳥だが、実質的に涙し心驚くのは作者であるので、Aに入れた。
- (4) 入谷仙介『唐詩名作選』（日中出版、一九八三）。
- (5) 『杜甫詩注』第三冊（筑摩書房、一九七九）一九六頁。中国でも擬人法説を支持する人は多い。例えば、黄建宏・金輝「情景溶炉千古臻唱——杜詩《春望》賞析」（『唐代文学論叢』一九八二——）、夏松涼『杜詩鑑賞』（遼

八

- 寧教育出版社、一九八六）、秦似『杜甫詩歌賞析』（広西人民出版社、一九八六）などである。
- (6) 『杜甫』（鑑賞中国の古典一七、角川書店、一九八七）八七頁。
 - (7) 丁硯農・焦龐顯『中国語動詞活用辞典』（東方書店、一九九三）一一八頁。
 - (8) 『水滸全伝』五三回（中華書局、一九五四）八七八頁。
 - (9) 『朴通事諺解』上、三九葉。晋の楊生が酔って眠っていて野火に囲まれ、犬が体の水を草にふりかけて救った故事。
 - (10) 王力『同源字典』（商務印書館、一九八二）五七六頁参照。
 - (11) 慧林『一切経音義』三八卷では「潑灑」に注して、「上は煎線の反し。俗字なり。考声に云う、潑、水を散ずるなりと。説文の正体は賛に従い、潰に作る。潰、汚し灑ぐなり。」とある。
 - (12) 調査した文献は、「詩経」「楚辞」「文選」「玉台新詠」「全漢三国晋南北朝詩」「先秦魏晋南北朝詩」及び「王勃」「楊炯」「盧照鄰」「駱賓王」「杜審言」「陳子昂」「岑参」「孟浩然」「王維」「李白」の詩集である。
 - (13) 『杜詩詳注』によれば、この①と④はそれぞれテキストに問題があるようだ。①については潑のところに注して、「一に流に作る」とあり、④については題注に錢箋を引いて、「この詩陳浩然本に見ゆ、また英草に見ゆ」とする。九家集注本などには採られていない。
 - (14) 『杜甫詩注』第三卷、一九九頁。
 - (15) 『杜詩詳注』一四四六首のうち「春望」まで（第四卷までの）詩数は一六七首、約一一・一％である。
 - (16) 『杜甫詩選注』（人民文学出版社、一九七九）七二頁。ただ、この句を擬人法とする人もいる。
 - (17) 『杜甫詩注』第四冊、三一五頁。

（一九九四年五月二三日受理）